

中京女子大 戸谷 修

(1) 家政学は、家庭生活の向上という極めて強い実践性を持った学問でありながら、現実の家庭生活において、どれだけ積極的に貢献しているかという点では、はなはだ疑問である。本報告は、この点の検討を通じて、実践科学としての解明に答えようとするものである。

(2) 現代日本社会が、家庭生活に、またその科学的認識としての家政学に要請している課題は、より良き社会の形成者としての次の世代の育成という事も含めて、主体的人間の形成場所として家庭をどのように創りあげるかという事であると考ええる。その為には、現在の非合理性をいかに克服していくべきかという点が問題となる。

(3) この為には、次の点が、まず再検討されなければならない。第1に、「向上をめざす家庭生活」のモデルが、欧米近代家族の様式ではなかったかという点の検討である。いかに現代史が世界的単一化をめざしているとはいえ、キリスト教的文化の長い伝統を背負ってきた西欧家庭様式をモデルにする事は、家政学の実践性を極めて弱める事になる。従って、日本の家庭生活の構造的及び精神的特質の解明がなされなければならない。第2に、家政学が今まで対象としてきた家庭が、主として中産階層以上の家庭生活に力点をおいてきたという事の検討である。日本の家庭が、中産化するの望ましい事ではあるが、現実には、それ以下の大多数を占める国民的課題に、家政学が答え、主体性の形成に寄与すべきである。